1469号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)　2024.11.18
〒690-0823島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

老い老いに

木幡智恵美

12

夕焼け通信が三年目に入り、百号を突破した一九九五年の十大ニュースは以下の通りだ。一位、阪神淡路大震災。二位、オウム真理教による地下鉄サリン事件。三位、金融機関の相次ぐ破綻。四位、大和銀行巨額損失。五位、沖縄少女暴行事件により基地問題紛糾。六位、統一地方選挙で東京は青島幸男、大阪は横山ノックという無党派知事誕生。七位、景気低迷による就職難続く。八位、三菱銀行、東京銀行合併で合意。九位、野茂英雄投手、米大リーグで新人王に。十位、二信用組合事件で山口元労相ら逮捕。

第百十七号編集後記に、沖縄少女暴行事件について、「この種の事件が後を絶たないのは、日本に駐留するアメリカ兵の六十%が集中する沖縄において、いまだ『占領軍』の意識が根強く、野放図に振舞えるからだ。」との佐木隆三氏の指摘をあげている。あれから三十年経ったのに、基地問題は解決の見通しが立たず、住民は様々な不安を抱えながら生活している。

マイクロソフト社がウィンドウズ95を開発したのもこの年だ。以来パソコンがぐっと日常生活の中に入って来る。当時まだ職員室でパソコンを使える者はそう多くはなかった。それが、ウィンドウズ95が出現してからは、パソコンの研修が増え、使用者が広がっていく。台数も徐々に増え、早期に辞めた私には、いつ頃から全員がパソコンを使うようになったかは分からない。が、県庁の嘱託職員として勤め始めた十二年前、自分にまで一台あてがわれた時は驚いたものだ。今では孫が小学校で配布されたタブレットを使って写真を撮ったり問題を解いたり、自在に使いこなしている。

その年の夕焼け通信の内容も盛沢山だ。隠岐へ渡った編集長は、釣りから始まり竹島問題、在日の問題にも踏み込んでいく。Rさんは施設で立ち上げた劇団にまつわる話題が大展開することになる。そして、石見支社で活躍してくれていたBさんは中国の大連の日本人学校へ行かれ、「大連信」（ダーリエンシン…大連だより）を、さらに、高知の鉄道好きIさんからは、「セマウル号、秋晴れの韓国航路」という韓国の鉄道旅行記が投稿されてくる。Oさんの「GEMS OF BRITAIN」に続き、夕焼け通信は国際色も出て来たのだ。

がらがら橋日記

宮森健次

馴染む

サ高住での稽古も四か月が過ぎた。何度も直に顔を合わせていると自ずと化学変化が起きるものだ。入居者の年齢層は九十歳前後、子どもたちとは八十年を隔てる。

ぼくが物心ついたときには、曾祖父母は父方母方ともに物故していたから、幼いときにそんなに年の離れた人と接した経験がない。ぼくの子どもは祖母、子どもにとっての曾祖母に会ったときに押し黙ったまま身を固くしていた。祖母は、「こげなしわくちゃの生き物なんか見たことないけん、こわかったとこだ」と言った。たぶん祖母の見立ては正しかったと思う。

ひょっとすると、落語教室の子どもたちも初めそうだったかもしれない。そしてサ高住の老人たちも小さな子どもたちにどう相対したものか戸惑いがあっただろうと思うのだ。たびたび接していないと異世代も異文化も異性も徐々に異界に姿を変えてしまう。

馴染む、という言葉は馴れ染むから生じたという。双方の境界がしだいに緩んで染みるように交わっていくさまが思い浮かぶ。子どもたちと老人たちとがまさにそれだ。稽古を終えると、子どもたちは稽古場に借りている一室の出口に立ち、老人たちにお礼を言いながら送る。老人たちも声をかけながら子どもたちの前をゆっくりと歩き、またカートを押して自室へと帰っていくのだが、子どもたちと老人たちとの物理的な距離は、回を重ねるごとに少しずつ縮まっている。子どもたちの頭の上に置かれていた老人たちの手は、やがて頬を包み、肩や背を撫でさするようになった。老人たちの手のひらのセンサーが子どもたちがそれを許しているのを感じ取っているのだ。

ぼくも子どもたちと同じように、入居者に馴染んでいっている。自分を規制していた蓋を一枚一枚外していくように。稽古が始まる前の、まだ子どもたちが来ていない時間からやってくる老人たちもいて、よくしゃべるようになった。

「私ね、学生時代東京にいたのよ」

「ううん、それよりずっと前かな。楽しかったわあ、あのころ。寄席にもずいぶん行ったのよ。ほかに娯楽もなかったけど、ほんとにおもしろかった」

「ああ、そのころだったら名人がいっぱいいたでしょうからね」

うらやましかったので正直にそう言った。

「そうなのよ。それが言いたかったのよ。ああ私、こんな話がしたかった。だってする人いないもの」

こうした時を重ねる先に、子どもたちにも心の底を語る人が現れ、子どもたちも自身のことを話したく思う人を見つけるのじゃないかという気がしている。

30代フリーター　トランプの圧勝をどう考える？

年金生活者　吉本隆明を師とし、「吉本原理主義者」を自称する者として米大統領選を総括するなら、「大衆の原像」を自らに繰り込む作業をより多くした候補者が勝利したと言える。

「大衆の原像」とは吉本が自らの思想のよりどころとした概念だ。ふだんは天下国家のこととか芸術や学問のこととか、日常生活から遠いことに関心を寄せず、自分や家族など近しい人の生活のことだけを考えて暮らす人間の像を指す。吉本はこの「大衆の原像」を自らに繰りこむことを思想の課題と考えた。それは思想ばかりでなく、政治にも当てはまるというのが私の理解だ。

30代　たとえば？

年金　２００９年の衆院選は「大衆の原像」を繰り込んだ度合いの差が勝敗を分け、自民党から民主党に政権が移った。その差は選挙スローガンからうかがえる。

自民党のスローガンは「日本を守る、責任力。」だった。当時はリーマンショックで国民生活が脅かされそうな状況だったのに、「日本を守る」はその答えになっていなかった。

これに対し、民主党は「政権交代。国民の生活が第一。」を掲げた。「日本を守る」などと天下国家のことは論じるが、肝心の国民生活に目を凝らさない自民党は政権の座から降りてもらおうというメッセージが明瞭だった。

30代　米大統領選も同様だと？

年金　トランプのスローガンは1期目のときから唱えていた「米国第一」だ。他国に奪われた富をアメリカに奪い返すというメッセージであり、インフレになった現在、それに苦しむ国民の心には4年前より響いたに違いない。

ハリスが掲げたのは「フリーダム（自由）」だった。「トランプ氏が在任中、中絶の規制強化を進めたことを踏まえ、女性の権利と自由を守る立場を明確にするためだ」（11月6日読売新聞オンライン）とされている。国民の多くは今のこの苦しい生活をどうしてくれるんだと思ったことだろう。

妊娠中絶を必要とするような事態に遭遇する女性は、そうでない女性にくらべるとはるかに少ないはずだ。その意味でマイノリティーと言っていい。マイノリティーが尊重され、多様性が重視されるようになったのは、社会がマイノリティーを切り捨てなくても済むほど豊かになったからだ。インフレによってそれがあと戻りしかねない状況になった現在、物価高に苦しむ国民にしてみれば、今はマイノリティーに配慮する余裕がなくなったというのが本音だろう。

30代　ハリスの敗北は必然だった？

年金　トランプの返り咲きは、他国のことをかまっていられなくなって覇権国家の座から降りざるを得なくなった現在のアメリカを象徴している。

ウォーラーステインが最初の覇権国家と位置づけたオランダが「オランダ海上帝国」と呼ばれ、次の覇権国家のイギリスが「大英帝国」と呼ばれたように、覇権国家はいずれも「帝国」の性格を帯びている。アメリカも例外ではない。

帝国の特徴は領域内では諸地域に権力が分散し、対外的には従属国や植民地を有しているところにある。オランダ海上帝国は各州が、大英帝国は自治権を持つ地方が権力を分有し、他方で世界各地に植民地を持っていた。権力が分散しているぶん中央の権力は絶対的ではなく、その座りの悪さを補うつっかえ棒が従属国や植民地の忠誠だった。

アメリカ「帝国」も同様であり、各州が強い独立性を持つとともに、世界各地に同盟国という名の従属国を有し、軍事基地を置いてきた。中国の経済大国化、軍事大国化はそれを脅かし、一時は一極支配とまで言われた超大国の覇権を後退させた。

従属国の忠誠度は低下し、その諸国に支えられていた国内の中央権力、アメリカの場合は連邦政府の権力が弱まった。つっかえ棒は逆に重荷になり、国内の統合が緩んで、格差の拡大をはじめとしたさまざまな分断が進んだ。

ニュース日記　946

中村　礼治

トランプ圧勝が物語るもの

30代　トランプはＮＡＴＯからの離脱をほのめかすなど、民主党政権にくらべると同盟国に対して冷たい。国内に向けては不法移民の脅威を強調して排外主義的な構えを見せている。

年金　その振る舞い方はグローバルな「帝国」の地位を捨て、ローカルな「主権国家」＝「国民国家」へと国家の規模を縮小させるもくろみと理解することができる。「国民国家」は等質な国民の存在を前提としており、「分断」とか「格差」をなくすことを理念としている。それは同時に異質なものを排除する傾向を生む。

「帝国」であることをやめて他の「国民国家」並みになることを目指すトランプに対し、ハリスに代表される民主党は今まで通り「帝国」の地位を維持することにこだわった。

域内に諸勢力を抱える「帝国」は「多様性」を理念とする。大統領選でハリスと民主党が「多様性」を強調したのは「帝国」であり続けると宣言したことを意味する。同時にハリスらは同盟国との関係の重視を訴えた。それは「帝国」につき従う従属国を手離さないという宣言にほかならない。

だが、中国の経済大国化、軍事大国化にともなうアメリカの覇権の後退は、「帝国」の維持をいずれ不可能にすることは目に見えている。